リバース

梢田　佑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
リバース

【Ｎコード】
Ｎ４３３０Ｈ

【作者名】
梢田　佑

【あらすじ】
中学時代に付き合っていた女の子・エリカが忘れられない鈴木。
ある日、偶然の再会を果たすが……

第1話：もどる

もどる。逆戻り。もどれ。

「なんの本を読んでるの？」

あのころの鈴木が言った。放課後の閑散とした図書室だった。つまり、なんの本かを知るのが目的ではなく、彼女との会話が目的なのだ。本来、近づくチャンスもないようなエリカとの。

彼女は本から目を離した。くっきりとしていて端麗な顔立ちでしかも体型はバッチリ、簡潔に言って彼女はかわいすぎる。はにかむとさらに愛らしい。

「有川浩の阪急電車。登場人物がみんな活き活きしていて、すごく面白いの」

そう言ってからエリカは静寂を作る。焦れた様子もなく、鈴木の出方をうかがっているのだ。鈴木がこれ以上話したいのか、そうではないのか。エリカは常に平等で、だれとでも親しくなれる才能があったが、それも相手を尊重することが前提で成り立っているのだからすごい。鈴木はもどる。逆戻りする。すごい、あのころの彼女は最高。

「有川浩ってたしか、ラブコメの短編を書いてたような……人違いじゃなきゃ、それも面白かったよ。小林さんが読書家なんて意外」

「よく言われるの」

静寂が途切れて、彼女は安心したように笑った。白い歯の整列がうかがえた。すべてが彼女の魅力へと繋がっている。

「鈴木くんがラブコメ読むなんて意外！」

「よく言われるんだ」

鈴木は笑って、彼女の正面の椅子に座った。すばらしい時間だっ

た。鈴木はその後、何度も思い出すことになる……図書室にひびく話し声と、白い歯の整列。

エリカと恋人同士になれたのは、いま考えても奇跡に近いことだった。なにより他の連中にできない話題を提供し、趣味を共有して、彼女に必要とされる男となったつもりだが、事実は分からない。だから奇跡としか言いようがない。

意外な読書家であるエリカは他の読書家がそうあるように、歪であったりねじれていたりはしなかった。コメディに笑ってホラーに震えミステリーに悩み、ラブロマンスで胸をときめかせる。鈴木は他の読書家に分類される、ねじれた性格の持ち主だったが、エリカが笑うと自然と笑みがこぼれた。そういう力が彼女にはあったのだ、ある種の呪いみたいに。

「それってなにも考えてないってこと？」

笑いながら肩をすくめるエリカ。鈴木は否定する。

「ちがうよ。本の楽しみ方を心得てると思う」

エリカがほほ笑む。「なにを読んでも面白いって思っちゃうけど、そうね……楽しんでるのはほんとよ」

ふたりはひとつ目の季節も、ふたつ目の季節も共有しあった。どれほど笑い合っても——ごくまれな事ではあったが、肌にやさしく触れてみても——エリカに対する興味が尽きることはなかった。じっさい彼女は完璧だった。どこまでも深く掘り進むことはできる。ふと思い立ったとき、彼女の未知の領域を探索することは容易い。しかし辿りつくのがどこであれ、彼女は必ず美しかった。

鈴木はすっかり魅了されていた。

「本物のサメを見たことがある？」

鈴木はエリカにささやいた。ふたりは部屋でビデオを観ていた。彼女はすこし眠そうだった。
「どうして？」
「すごく綺麗なんだ。空と海の色に調和して、でもおどろおどろしくて。小ぶりのやつだけど、すごく綺麗だったんだよ」
「こわくない？」
質問に対する適切な答えを考える。
「うん。でも、空と海にはさまれて、いつも不可逆的に生きてるって感じがしたんだよ。サメって止まると死ぬだろ。泳いで泳いで、いまを生きてる感じだった」
彼女からの返事がなかった。鈴木は突然、自身の行為を客観的に見つめ、我に返った。えらく恥ずかしくなったのも覚えている。
「へんかな」
「ちょっとね」
それから鈴木が大好きな笑みを浮かべた。ひとに伝染する笑み。
「でもすてきね」

サメの話で微笑んだのは、後にも先にもエリカ一人だった。――もどる。逆戻り。もどれ。本気で彼女が好きだった。彼女のなかのダイヤをすべて掘り当てるつもりでいた。逆戻り。いまの鈴木はどっぷりと落ち込む。
ラブロマンスは終了。
なぜならみっつ目の季節はやってこなかったからだ。

「世の中スコッチで乗り切れないことなんてないよな」
先輩の北条は極めて楽天的にそう言った。

あれから十数年がたち、鈴木は二十七歳のほどほどな駄目人間となって、今日も断りきれない先輩社員の誘いで居酒屋に連れ込まれ

ていた。
飲酒ができない鈴木を知ってのことだったが、それはいまに始まったことではなく、彼はひとの事情にいちいち配慮しないほうだったため、今日もまた上機嫌でスコッチを傾けている。鈴木はそんな北条をすこし恨めしく眺める。

「神々の発明品だよ。スコッチを一瓶あける、それだけで嫌なことなんかなーんにも無くなるんだから。最初に穀類を発酵させようと思ったやつは天才だね。家に帰るとあなたお帰り、発泡酒が三分の一残ってるわよ、なんて言われたりして。はは。まあそれを昨日も飲んだわけだけど。まじめな話だぜ。それで」

北条は目を細め、ひごろの不遇に思いを馳せたあと、キッと鈴木を見やる。三杯目のウーロン茶を飲んでいたころだ。鈴木は思わずむせた。
こちらをまともに見ながら、北条は弁舌をふるい続けた。

「酒の飲めないお前はストレスだらけだ。課長の指示にイライラ、課長補佐の指示にイライラ。同僚にだってそんな感じ。まあ心配なさんな。もうひとつあるんだよ、神々の発明が」
ここで鈴木が口を挟む。「女の子でしょ」何事もなかったかのように話は続けられる。「女の子だ」そう言って、北条は酒をあおった。

「聞き飽きましたよ。それに僕だって恋人くらい」
「寂しい人生だな鈴木。俺はクリスマスの予定を聞いてるわけじゃないぜ。お前には恋人はいたとしても、エリカちゃん以上の女の子はいないんだ」
今度は本気でむせ込んだ。一瞬カウンターに飛び散るのではないかと思った。

北条にエリカのことを喋ったのは失敗だった。あれはいつだっただろう。記憶を戻る。そうそう、北条との三度目の酒の席で。それ以来ことあるごとに突付かれていた――図星だっただけに痛かった。鈴木は子供のころ、引越しが原因でエリカとの音信を絶やしてしまったことをいまだに悔いていた。

もちろんエリカにも問題はあるはずだ。なぜなら彼女のほうからも音信を絶やしたからだ。子供というのは時間と距離に敏感な生き物で、あのころの二人も例外ではなかった。

「子供のときの思い出です」言い訳がましく付け加える。「それも、すぐ忘れちゃいそうな……とにかく、僕はこのあと彼女の家に行きます。発泡酒じゃなくてビールを飲んで、いやな思い出もぜんぶ忘れられますよ」

「彼女、お前が酒を飲めないこと知らないのか？」

あきれたように言われたので、いやな思い出がひとつ増えたと、鈴木は無言でウーロン茶を啜った。

「まあそんな顔するなよ。鈴木。朗報だ。このまえ旅行券の話をしただろ？」

数枚のチケットがカウンターに置かれる。

「行くつもりだったんだけど子供の部活やら嫁さんのお稽古やらで予定が合わなくてさ。期限切れそうなんだ。お前にやるよ」

鈴木はチケットを受け取る。北条は最後に余計なことを言う。

「彼女とでも行ってこいよ」

鈴木はひとりで電車に揺られていた。

渇きを潤すようにコーヒーに手を伸ばした。鈴木は温泉街を目指していた。都心の喧騒から離れて、ひとりで休日を満喫しようと思

っていた。じっさい四万円の旅行券は鈴木一人分の宿泊料だと考えると、かなり高価な宿をとれたし、貸切り露天風呂は豪勢な休日にふさわしい代物だろう。

余計な思考はシャットアウトし、鈴木は素直によろこんだ。それが素直さとよべるものならば。よろこぶべきが真実であって、よろこんでいるのは本当じゃない。

「このクソオヤジ！」

センチメンタルは壊れた。鈴木は女の叫び声に振り向いた。もっとも、鈴木以外の乗客全員もそうしている。

まず、二十代半ばの女性と、それから五十すぎの中年男性とが目に入った。ふたりともドア付近でなにやら揉めている様子だった。

「いま、やったでしょ。え？　完全にやったわよね。認めなさいよ。べつにいいけど。わたしが言ってやるわ。親切でしょ。大丈夫よ。そんな顔しないで。嘘なんか言わないわ。あんたは――ド変態の――大クソオヤジ！」

「大丈夫ですか？」

鈴木は大胆にも声をかけた。要約すれば「静かにしてくれ」と意味はそれほど変わらない。男性のほうは蒼白な顔で、女性は思いもかけずにっこりと笑った。

「苦痛に思うのはあとなのよ。いまはこのクソ野郎をなんとかしないと」

鈴木は思う。これは困った。この女はかなりおかしい。

女性は笑みを引っ込めると、再び男性に向き直った。思いのほか真剣な表情で。

「わたしが聞きたいのは、ほんとうに反省しているかってことよ。

それがどれだけ大事かわかるわね？　ねえ、それともまたどこかで、第二のわたしを作るつもり？　また女性のこころを傷付ける気なの？　え？　ねえ？　どう思うわけ？」

「そんなつもりは……だいたい確かに……確かにやったかもしれん。ああ。そうとも。やったさ。認めるよ。しかしそれがなんだ？　女のケツを触ったとして、それが男としてなにが悪いっていうんだ？　きみがそこにいた。いやなら座席に座ればよかった。きみはおれが近づいてもまったく気にも留めなかった。ええ？　そうさ。やったとも。きみと一緒にね。へへ。きみもまた共犯者ってわけだよ」

だいたい話が飲み込めてきた。男性はハイになっている様子だった。鼻の穴が広がっている。鈴木は憤慨して言った。

「なに考えているんですか。あんたはあんたの娘さんほどの女性に、そこにいたからという理由にならない理由で下のほうの――あの――」

女性をちらりと見る。彼女の心の傷はいまどんなものだろう？　おそるおそる口にする。

「あれを触ったんだ」

「お尻でいいわ」

「お尻を」鈴木は安心して言った。

「痴漢はれっきとした犯罪です。そこに女がいるから触る理論が通用するはずがありません。慎んで罰を受けてください。そりゃあ僕も、多少は、ちょっとだけ、あの女の子かわいいなとか、触ったらどんな感じするんだろうとか、ちょっとだけ考えたことはありますよ。ちょっとだけ。でも我慢しますよ。毎日毎日。まったく。男の欲望もコントロールできないなんて、なんて野郎だ！」

「ちょっと黙っててくれる？」

「はい」

「オヤジさん」
彼女の顔は冷徹そのものだった。彼女もハイになっていた。
「もうすぐ駅よ」

電車が停車するやいなや、なんなく男性は駅員に突き出され、事は収束に向かった。最後に男が振り返り、こちらを睨みつける眼光にも、彼女はいっさい物怖じしなかった。鈴木ですら震え上がっていたのだが。

なんだかすごいものを見た気がして、電車が走り出したあとも、鈴木はしばらくなにも言えなかった。女性は微動だにせず車窓の景色を眺めている。やがて周りも興味を無くしたのか、無数の視線が感じられなくなる。

「あの」
おそるおそる声をかける。自分としては、一年分の労力を使い果たしたと思う。
「災難でしたね……」
言ってしまったあと、あまりの気配りのなさに絶望する。あまりに分かりきった台詞、常套的で、それでいて優しさを欠いた台詞。
しかし彼女は笑った。一点の曇りもない笑みだった。
「さっきはありがとう」
いい笑顔だ、と思った。みた人を喜ばせる。鈴木は小さな笑みを作った。肩の荷が下りたようだった。

「これからどこへ？」当たり障りのない質問をぶつける。彼女は嫌ではないらしく、少孝ののち答える。
「映画を観に。片道二十分くらいかな。へんに思うかもしれないけど、すきな小説の映画化だから、どうしても観たいの」
マイナー映画がごく一部の地域でしか上映されないのはよくある

ことだ。鈴木自身、困窮のはてに休日を使い切って劇場へ出かけたことがあった。俄然この女性に親近感をおぼえる。

「僕の場合、どうしてもビデオが待てなくて……四十分かけて他県まで観にいったことありますよ。それに、映画はスクリーンが一番いいんですよね」

「そうなの。家だと飛ばしがちなんだけど、スタッフロールを眺めながら、余韻にひたる感じがいいのよね。コメディ映画だと、ほかの観客の笑い声だけで楽しくなるし」

再び彼女はほほ笑む。そこでようやく、彼女の顔をまともに見た気がする。

はっきり言って美人だった。ショートカットで薄化粧、男性的なイメージすら浮かびかねない装いだが、彼女の場合はそのまま端麗さへ繋がっている。

エリカを思い出した。思い出してからびっくりした。エリカならとても「クソオヤジ」だのの暴言は吐かないことだろう。しかし、自分がなぜエリカを思い出したのか、鈴木は思い出していた。

笑顔が似ているのだ。とても。

「お兄さんはどこに行くの？」

いい兆候だ。彼女から話しかけてきている。

鈴木はたっぷりと間を置いた。

「鈴木です」

彼女はまたほほ笑んだ。だが、自己紹介に対する一般的な反応だった。鈴木は少々ガッカリしながら、トーンダウンした声音で続ける。

「たまには温泉街ででもゆっくりしようかなと思って」

「それって泊まり？　いいわね。ひとりで？」

最初と最後の質問に、まとめてうなずく。ばかにされるかと思ったが、一人客だと知っても、彼女は気に留めた様子もなかった。
電車がゆれる。居心地のいい時間が流れる。いっそこのまま静寂に浸りたいとすら思った。しかし、彼女はそれを破った。
電車のせいではない。瞳が思考にゆれている。彼女はしばし、考え込んだ。こちらを見定めるような目つきで、空間が一転、居心地の悪いものに変わる。

やがて、息を吐き出した。――もどる。逆戻り。もどれ。――鈴木は彼女のお眼鏡にかなったらしい。
「わたしはエリカ。小林エリカっていうの。よろしく、鈴木さん」
鈴木は彼女を見やる。
もどる。もどった。念じ続けてきた願望が、叶った。

愛した女性がいま、目の前にいる。

第2話：しあわせな時間

「なんだかクサイ話だが」
挨拶代わりのようだった。携帯の向こうから、北条の陽気さが伝わってくる。
「偶然彼女と再会できたことはよしとしよう。すばらしいラブストーリーだよ。だけどな、まずひとつに、お前の恋人はどうしたんだ？　だいたい彼女、話を聞いたかぎりではずいぶん昔とちがうくないか？」
その言葉の意味を考える。

鈴木は落ち着かない気持ちを抱え、ベッドに座って飛び退き、お茶をすすって噴き出し、豪勢な室内をうろついていた。窓によりかかると、旅館から見える景色が格別であると気付く。しかし、鈴木の目にはもはや、奇跡的に再会した彼女のことしか頭にない。相も変わらずかわいいエリカのこと。

「僕だって、最初はそう思いましたけど。でも笑顔がそのままなんです。ルックスだって完璧だし。北条さん、僕どうすればいいんですか？」
最終的に、声が情けなく滲んだ。電話の向こうの先輩に泣きつく。一つ目の質問には答える必要はないと思った。北条だって分かっているはずだし、少なくともいまこの瞬間には悟ったはずだ。
北条はこの状況を面白がっているのだろうが、聞こえてきた声は思いもよらずまじめだった。

「落ち着け。深呼吸をしろ。したか？」していないが、返事をした。
「よし。それなら次は、落ち着いて、いま自分の置かれている状況を整理しろ」

「昔の彼女と会った」
エリカ。彼女と会った、それがまずは第一だ。いちばん大切なことを吐き捨てると、次の言葉は簡単だった。
「高級旅館に泊まって、風呂に入って、これから眠って、明日は彼女とデート」
「そらみろ、とんだラッキーだ！」北条がうれしそうに言う。
「もし彼女に男がいたら？　今日だって、言わなきゃ僕のことを思い出さなかったし。北条さん、もしも――」
「バカだな」
泣き言をさえぎり、北条はそう一蹴する。
「子供時代の恋人なんか、お前以外の人間は覚えてないよ。明日会うんだろうが。これからがチャンスだろ」

ほぼ五分前に待ち合わせ場所につき、エリカの姿が認められないと、鈴木は神経質にあたりを見渡した。彼女がこちらより遅れてやってくることなどありえなかったからだ。歩行者の行き交う商店街は見通しが悪く、携帯の番号を聞いておけばよかったと後悔した。
エリカがきたのは二十分後、鈴木が周囲に気を配ることに飽きていた時間だった。エリカは昨日と違いマスカラを塗りたくっていて、彼女がまばたきするたびにカールされた睫毛がいそがしく頬をおおった。
「ごめんなさい。寝坊しちゃった」
「全然いいよ」
鈴木は笑いかけた。
「それより、どこに行くか考えてないんだ。まだこんな時間だし――」

「ショッピングがしたいの。すこしだけ。いいでしょ？」
「全然いいよ」

エリカは鈴木の手をとると、近くの専門店に連れていった。すらりとした美脚を惜しげもなく晒した女性客が、数人。男性服は取り扱っていないようだ。むろん、心底楽しそうなエリカといれば、鈴木にとってはどちらでもいいのだが。

さまざまな服を品定めするエリカのそばで、鈴木はありったけの幸福を噛み締めていた。これを幸福と呼ばずになんと呼ぶのか。頬が緩みそうになる。ここにいるのはほんとうにあのエリカなのだろうか。夢の成就は信じがたく、未だ夢の続きに思える。彼女と話したいことが山ほどある――いままで過ごしてきた日々について。

「ちょっと」
とげとげしさを隠しもしない高い声が聞こえた。鈴木は振り向いた。
ひとりの女性がエリカに突っ掛かっていた。
「それ、あたしが最初に取ったんだけど。返してくれる？」
エリカの手にあるパーカーのことを言っているのだろう。あまりの言い草に、エリカも仏頂面で応じた。
「陳列棚に置いてあったわ」
「ちょっとの間だけでしょ」
不穏な空気が流れる。鈴木は仲裁に入ろうとして、次の瞬間には立ち止まった。高速で世界が動いた。女性のうめき声が聞こえた。

エリカは相手につかみかかっていた。鈴木は格闘技の経験はないが、それでも絶妙だと言える間合いをとって、きっと数秒もかからなかったに違いない。エリカの瞳の奥に絶え間ない感情がうごめく。
「陳列棚に置いてあったわ」

ゆっくりと繰り返す。
「陳列棚に」
女性は何度もうなずいた。しばらくの間、エリカは相手をじっと見つめていた。女性が首を縦に動かすたび、瞳にフィルターがおりていくようだった。やがて、エリカは相手を放した。
相手もなにか言いたそうに唇を噛み締めていたが、「陳列棚に置いてあったのよ」ドスを利かせた声でもなく、エリカが歌うように言うと、女性は店を出て行った。鈴木はなにも言えずに、いまの状況について考えていた。

エリカは例のパーカーをあらためて見やった。
「ひどい服ね。やっぱりこれはやめるわ」

二時間後、ふたりはようやく休息をとることにした。十数店舗を付き合わされた鈴木の疲労はピークに達していて、奇跡的に見つけた喫茶店はオアシスに思えた。

ブレンドコーヒーとアイスティーを注文し、店の賑わいに耳を傾けたあと、エリカに向き直った。頬骨が高く、すらりとしたラインを描いている。昔はいまより丸みがあったし、面長な印象もなかった。あのころを追懐しかけて、店員の声に呼び戻される。

口紅を気にしているのか、エリカはストローを上品にくわえた。すこし吸って顔を離す。「ねえ」
鈴木は疲労を追いやろうとする。「なに」
「ほんとうにすごい偶然よね――あのころが懐かしいわ。有川浩を覚えてる？」
「もちろん。きみも僕も気に入ってた。ホラー作家に移行するなん

て」
　エリカはけたけたと笑う。
「わたしは好きだわ。ラブコメなんてくそくらえ……いまになってみればおとぎ話だって分かるわよね」
　同意を求められて、鈴木は答えにつまる。しかしエリカは返答を待たなかった。

「ねえ、どうかへんに思わないでね」
　エリカはアイスティーを口に含み、飲み込んだ。こちらが曖昧な相づちをくり返すあいだにも、彼女は喋り続ける。
「サメの話が忘れられないの。すごくすてきな話だわ。空と海に調和して、不可逆的に生きるサメ。
わたしが知りたいのは――」

　言葉を区切ったのは、いくぶんわざとらしさがあった。こちらに考える時間を残すためか、言葉の含みを明示するため。エリカがストローから口を離す瞬間、鈴木の胸も高鳴っていた。
「恋人はいるの？」
　心臓が凍りつく。待ちに待った瞬間なのに、いざきてみればもう少し後でよかったと思う。鈴木は適切な返事を考える。

「いないよ。ほんとうは……」
　エリカが訝しげな顔をした。本心を打ち明けるのがいかに愚かしいかに気付く。
「昔はいたけど、いまはいないっていう意味」
「でしょうね」
　緊張感がながれ、ゆったりと辺りに漂うのを感じる。
「わたしもよ」ためらいながらも、エリカはそう言った。コーヒーの苦味がすこしずつ舌から溶けて無くなった。

「肌が焼けるわ」
エリカはショートカットをうだるげに撫でつけ、腕を大きく広げた。通行人がまじまじと見ているが彼女はおろか、鈴木もまったく気にならない。じっさい、商店街は肌が焼ける。日差しを遮るものがないので、もろに肌に照り付けてくる。エリカは歌いながら歩き、鈴木は今日一日の手ごたえを感じていた。

昼食の中華料理は最高だった。彼女も一口食べたとたんに顔色を変え、にこにこと喋り始めた。その後、ソフトクリームや串カツなどを食べたせいで、胃袋は限界を訴えていたが、エリカはまだ余裕のようで、それだけでも安心する。

歌うように言う。
「もう帰らなきゃ」
「どうして？　日没まで時間がある」
鈴木のあわてぶりを見かねたのか、エリカは首を振る。
「ちがうの。悪いようにとらないで。片付けなきゃならない仕事があるのよ。よかったらまた――」

エリカは鞄からメモ帳を取り出し、住所と電話番号を走り書きしたあと、鈴木に渡した。いたずらっぽくほほ笑む。「午後の七時以降はだいたい家にいるから」
「そうか。わかった。また電話するよ」
内心の落胆を隠し切れずに、だが何度もうなずく。最寄りの駅はだいぶ遠い。
「タクシーを呼ぶ？」
「大通りで捕まえられるだろうから、いいわ」

ふたりは一瞥しあい、先に視線を外したのはエリカだった。彼女

は商店街を抜けた先へと歩きはじめた。鈴木はしばらく、その靴が遠のく音に身をゆだねていた。日差しの強さも忘れるほど、それは甘美な感覚だった……靴音が近づいてくる。鈴木は疑問に思って顔を上げる。

エリカの顔がすぐ目の前にあった。甘美な感覚が切り替わり、唇の感触を認めずにはいられなかった。大げさなほどの吐息が漏れてくる。エリカは顔を離す。

「なんて顔をしてるの、お兄さん」

舌が硬直したように、なにも答えられなかった。エリカはやけににやにやしている。通行人の視線が今度ばかりは気になる。「ただ――僕は――そんな大胆なんて知らなかったから」答えになっていない答えをぼやく。

エリカは再び踵を返すと、こちらを覗き見していた通行人に、相手が困惑していることもお構いなしに、我が物顔で宣言する。

「今日はいい日ね」

鈴木にとっても。

第3話：引っかかり

もどる。もどれ。もどる。もどれ。何度もつぶやく。もどる。そうすることで気分を紛らわそうとする。

無理だった。かすんだ天井に意識をこらした。しかし、ちっともよくならない。鈴木の目はかすんだまま。エリカを思い出さずにはいられない。

ポルノ雑誌を開いたが、どの女性も（外国人でさえも）エリカに見えて仕方なかった。気晴らしにはならず、余計悶々とするだけだった――正直、一刻もはやくこの煩悩を取っ払いたい。

普段めったに買わないポルノ小説を二冊購入し、旅館に戻ってからは文字列との格闘だった。「マユミは生まれ落ちたばかりの天使のように白い肌を濡らし、よろこびは真珠の雫をまたひとつ、煌かせていった」とんでもなく陳腐な文章ばかりだったが、鈴木はすっかり興奮していた。

携帯が鳴った。鈴木はあわてて本を閉じ、左手でそれを取った。

「もしもし」

「彼女はいけそうか？」

思ったとおり北条だ。鈴木は投げやりに応じる。

「手ごたえがあります。ちょっと昔と違うけど、彼女は僕のことが好きだ」

「やったな。彼女は？　いま何してる？」

「もういまは一人なので……」

ベッドに投げ出された小説をちらりと見る。『蜜の穴の狩人』

「本を読んでました」

いたたまれなくなって、早口で付け足す。

「電話を切ってもいいですか？」

「まあ待て。明日には戻ってくるんだろ？　ぜひエリカちゃんに会いたくてさ。俺の嫁さんもその気だし、みんなで食事でも――」
急すぎる身勝手に鈴木は通話を絶った。北条もばかではないのでしばらく掛けてこないはずだ。萎えきった身体で本をつかむと、下半身の反応がないことを認め、二冊ともリュックに突っ込んだ。
それから就寝まで、エリカに電話をかけるかどうかで悩むことになった。

あのころの鈴木はエリカの手をとって、なだからな坂道を歩いていった。
「鈴木くん」
控えめだがよく通る彼女の声は、鈴木をすぐに高揚させる。
「このクソオヤジ！」

鈴木は目を覚ました。思い出せないが、いやな夢を見ていたようだ。その証拠に汗をぐっしょりかいている。光が朝の訪れを知らせていた。
朝食をとり数十分間テレビを見たあと、じっくり思考が起動しつつある音を聞くと、鈴木はエリカに電話をかけた。慣れない番号に多少もたついた。

「はい」なんてことはない女性の応答。しかし、エリカだということとはすぐに分かる。
「鈴木です。小林さん？　あの、お願いがあるんだけど、いま大丈夫？」
「ああ、鈴木くん。わたしは大丈夫よ。なに？」
彼女の声が心持ち明るくなったことに浮き立つ。

「ほんとうに突然なんだけど――そのうちいつでも、僕と僕の会社の先輩、それから先輩の奥さんと四人で食事に行かないか？」
返事がない。切り出しかたが悪かったのだと思う。
「きみの話をしたら、すっかり会いたがっちゃって……駄目ならいいんだ」

「どんな服を着ていこう？」
携帯の向こうで歌うような声が響く。
「今晩でしょ？　あなたの先輩にへたな事できないわ。ねえ鈴木くん、すごく緊張しちゃう。ナチュラルメイクがいい？」
「来てくれるだけでいいんだよ。今晩？」
「早いほうがいいわ」
鈴木はすっかり面食らってしまった。ありがたい反面やめてほしい気持ちがある。でも、エリカなりに真摯に努めようとしてくれているのだろう。鈴木はしばし思案した。
「そうだな……先輩にも都合があるし。予定を聞いてみるよ」

同日の午後七時半、鈴木はレストラン前に待機していた。およそ北条の趣味とは思えない瀟洒な建物だ。訪れる人々も一ランク上という感じがする。
腕時計を見る。約束の時間より数分遅れている。北条夫妻は既に中で待っているかもしれない。エリカの姿はまだ見えない。
場所が分からないのではないか、と思った。杞憂に終わった。タクシーから降りた人は紛れもなくエリカだった。その装いにギョッとする。
「早いのね」
臆面もなくそんなことを言う。
彼女のシャツとジーンズは両方ダボダボで、たくさんの皺がより、

そのうえ上着などはいっさい着ていない。汚れが際立つ白いスニーカー。
鈴木はためらいながらも口にする。
「あのさ。ごめん、服装についてとやかく言うつもりはなかったんだけど」
彼女はパッと顔色を変える。
「いいでしょ、これ。なに着ようか迷ったんだけど、やっぱり自分でもイチオシのやつじゃなくちゃね。ずっとお気に入りのやつなの」

それから、建物を見上げる。
「すごいレストランね」
エリカを乗せていたタクシーが走り去る。鈴木は恐々と彼女を眺めていたが、彼女は腕を引っ張って、レストランの中へ連れていく。
店内はいくぶん薄暗く、室内灯が抑えられていた。これならこちらの服装も目立つまい。鈴木は内装に感謝しつつ、店員に席へと案内された。案の定、北条夫妻は先に来ている。

「遅れてすみません」
酒ですっかりできあがっていた北条は、陽気な挨拶を済ませる。夫妻のなかで既に雑談で盛り上がっていたらしく、夫人は名残惜しそうにしている。
彼女は北条と同じく、興味と好奇心から生まれたような性格だが、それらしい気品でうまく隠されている。北条が三十の半ばだから、彼女もまたそのあたりの年齢なのだろうが、染色された艶やかな黒髪が、年相応のうつくしさを醸し出していた。

エリカがほほ笑んだとたん、空気がぱっと華やいだのを感じた。
「小林エリカです」
笑みを絶やさずに、一歩前に出る。彼女の服装がライトに晒されるが、北条たちは気にした様子がない。

「北条です。こいつはうちの嫁」
愛想よく言って、夫人のほうもそれに倣う。女性同士、ふたりがなにか言葉を交わしているのが分かる。北条がこちらに顔を近づける。

「めちゃくちゃかわいいな」
曖昧にうなずいてから、小声で言い添えた。
「でもちょっとおかしいんです」
「そんなの見りゃ分かるよ」

次々に運ばれてくる料理を味わいながら、鈴木たちはさまざまな話をした。エリカが絶えずにこにこしているのがうれしかったし、鈴木が無理に喋らなくても、北条はやたらに饒舌だ。
話の矛先はやがて、鈴木とエリカの再会に向けられる。

「ほんとうに偶然よね。でもよく分かったわね――だって、十数年会っていないのでしょう？」
北条夫人が感心したように、その実は関心のあるまなざしで、鈴木たちを眺め回す。ちらりとエリカを確認してから、鈴木のほうから答える。
「ちょっとごたごたがあって。最初は分からなかったんですけど」
「痴漢と口論していたら庇ってくれたのよ」
料理を口に運びながら、エリカが唐突に言う。視線が一気にそちらへ集まる。そのことを既に知っていた北条はともかく、夫人はちょっと眉を固めて、困惑の色を滲ませながら言った。
「大変だったわね」
「ええ。でも彼が助けてくれたので」
また、料理を口に運ぶ。次の話題に困窮している周囲を残して、エリカはたまらなく色っぽく、上目づかいに鈴木を見つめる。

「サメの話をしてもいい？」
ささやくように言われて、鈴木はうなずきそうになり、我に返ってあわてて振り切る。中学時代の戯言を話される？　北条の嫁さんまでいる、いまここで？　想像しただけで顔が火照りそうになる。
「なんでだよ？　だめだめ。話を変えよう」
「いい話なのに」

本気で言っているのだろうか。エリカは頬を膨らませて、今度はサラダに手を伸ばす。北条の呂律が徐々に回らなくなっている。夫人と鈴木は肩をすくめる。

二回目のデートは話題の映画を見逃したことから始まった。エリカは残念そうに映画案内のチラシを見ていた。もっとも、彼女が遅刻をしなければ、いまごろ二人は席に座れていたのだろうが。

代わりに、ターミネーター7のチケットを購入した。6でマックジー監督が降板し、7でクリストファー・ノーラン監督に代わると思われたが「ダークナイト3の制作に忙しい」と一蹴され、まわりまわってなぜかクリス・コロンバス監督に依頼が入ったといういわくつきの映画だった。彼の第一声は「子供はでますか？」だったそう。

終戦後の近未来で生き残っていた子供型ターミネーターと、ジョン・コナーの訃報に精神的に不安定になったケイト・コナーが織り成すハートフル・コメディであり、パンフレットによると、2のテーマを監督なりに特化させたらしい。

「楽しみね」
コーラを買ってきたエリカが隣に座る。「はい、鈴木くんのぶん」

そう渡されたのはオレンジジュースだった。「コーラは？」泣きそうになるのを抑える。エリカは肩をすくめる。「昔はきらいだったじゃない」

場内の明かりが消えた。映画予告が始まる。ハイレベルな演技力で評価されたものの賞とは無縁だった『シンプル・ジャック』の予告編が流れる。動物と心を通わせる男が主人公で、彼の心理を表現するように無垢な映像が流れる……観客は静かだ。場内が一体となって、スクリーンの映像に心傾けている。

がさがさしている。

耳障りな音だ。ほかの観客も気にしている。鈴木は注意しようと辺りを見渡した。ポテチを掴んだ指先がぬっと現れる。

「鈴木くんも食べる？」

エリカは片手をポテチの袋に突っ込んだ。がさがさした。周囲の客がこちらを睨んでいる。鈴木はなすすべもなくそれを見ている。

大口を開け、エリカがポテチを口に含んだ。映画本編が始まったところだ。バリバリと大きな音が場内に響く。彼女の耳元に、鈴木は顔を近づける。

「まずいよ」

「なにが？」

「静かにしなきゃ」

「周りが神経質すぎるのよ」

「だめなんだって」

少々不満そうではあったが、エリカは音を抑えるよう動作に気を払いはじめた。それでも劇中、幾度となく耳障りな音がした――そのたびに観客が耳をそばだてているのが分かった。鈴木は映画を楽しむどころか、一刻もはやく場内から解放されることを願った。

「面白かったわね」
スタッフロールの最後の一文字まで堪能したあと、エリカがようやく立ち上がる。ほかの観客がうとましそうな顔をする。エリカは上機嫌で語り続ける。
「ラストで涙を流すシーンには興奮したわ。機械に宿る心って、昔からの伝統的なテーマじゃない？　スピルバーグのＡＩを思い出すわ」
「そうだね」
頭痛が起こりはじめていた。エリカはとてもかわいいし素晴らしい肉体の持ち主だが、再会したとき既に違和感を覚えていた――彼女はおかしい。

太ももが剥き出しのジーンズが、太陽に照らされたショートカットが、健康的な肌の輝きが、彼女自身をカモフラージュしている。彼女が笑う。鈴木に逆らうことはできない。
「ねえ」
鈴木の腕を絡めとり、エリカは自らの胸に押し付けた。喜悦やら怯えやらで、鈴木はその場に凍りつく。べつの意味でのどきどきが一度に押し寄せてくる。
「わたしたち、出会ってもう十数年でしょ？」
「デートをして五日だ」
「大人になってからはね。そう。十数年と考えても、ちっともおかしくないはずよ。わたしに着いて来てくれたら、とんでもなくいい気持ちにしてあげるんだけど」

少女がおだやかに線路を渡り、鈴木に歩み寄る。白い歯の整列が垣間見え、彼女の心が清純そのものだということを表している。つ

やつやした純白で塗り潰されているのが分かる。鈴木は彼女の手をとる。
「とびきりの提案があるの」
少女は純粋な笑みを浮かべた。
「とんでもなくいい気持ちにしてあげるわ」

どこで踏み間違えたのか。悪夢のなかで鈴木はそれだけを思う。もどる。もどれ。もどるのだ。二度とつけ込まれないように、彼女のダイヤを掘り当てる。
「一昨日はごめんなさい」留守電のメッセージが再生される。そんなものは聞きたくないとばかりに鈴木は蒲団をかぶる。

「よく分からなかったの。わたしきっと、最悪なことを言ったのね。ごめんなさい。なんて言えばいいのかしら？　ほんとうに後悔してる。また会えたら、何度かデートをしてくれたら……今度こそ最高のセックスができるわ。お兄さん、電話して。お願い。会いたいの」
さらに留守電が再生される。
「なんてこと！　わたしっていつもこうだわ。怒ってるようならどうか言ってちょうだい。わたしの服が悪かったの？　うまくいかないことばかりで苛付くわ。電話をくれたらすぐにキスしにいくわ、それも深いやつ」

ごつい指が伸びて、留守電が消去される。
北条が溜め息をつく。
「よかったじゃないか。プレゼントつきだとさ」
「それマジで言ってるんですか？」
蒲団からすこし顔を出して、うらめしく北条を見上げる。しかし彼は飄々としている。
「いますぐ電話しろ。なにをそんなにビビってるんだ、ふつうのか

わいい子じゃないか。待ちに待ったチャンスを棒に振る気なのか？」

あるいは昔のエリカを知らなければ、そんなふうに思えたのかもしれない。鈴木は返事をせずに蒲団に丸まる。女性の声がする。北条夫人だ。

「そんな無理に言ってもしょうがないでしょ。鈴木さん、なにかあったら私たちに言ってね。まったく、このひとったら、部屋にズカズカ上がり込んで！」

しかし北条の嫁さんである。声には分かりやすい興味が滲んでいる。なんの意味もない悪態を心に吐き捨てたあと、鈴木は枕に顔を押し付ける。

「します。電話はします。だからもうどっかいってください」

それがいまの正直な気持ちだ。北条夫妻は互いに顔を見合わせたあと、アパートの部屋を出ていった。こういう引き際のよさも北条なのだ。だがひとりになった部屋は余計に鈴木に重圧感を与える。

蒲団から這い出ると受話器を取った。ボタンを押す手が震える……が、それはただの自意識過剰だと気付いて、冷静に震えない手でボタンを押した。

コール音がする。ここで受話器を置いても後悔はしないと思う。

「もしもし」

「ごめん」

第一声がこれだ。エリカは声音を変える。

「よかった――鈴木くんね？　ああ、よかった。悪ければもっと待つことになると思っていたのよ。考えすぎかな。でもよかった。今度はいつ会える？」

「いつでもいいよ」

エリカの声に安堵して、思わず口にする。

「いつでも、すきなときに」

第4話：崩れる

電話を切ったあと、ちょうどタイミングよく、部屋のチャイムが鳴らされた。どうせ北条あたりだろうと思っていたので、「どうぞ」とぶっきらぼうに応じた。

ドアノブが回された。驚きを禁じえなかった。鈴木はぶっきらぼうなままその場に立ち尽くした。

「鈴木くん」

やさしくおだやかだが弱々しい。エリカと出会ってからは忘れ去っていた声だった。

「近くに来たものだから」

鈴木は目の前の女性を見つめる。一ヶ月前に別れた元彼女のサエが、あのころのままの長髪で、いまそこにいる。「どうぞ」と言う。もうぶっきらぼうではない。

「電話してくれればよかったのに」

彼女は肩をすくめる。意図がまったく読めなかった。鈴木は彼女にふられたも同然なのだ。「なにか用？」

「最低だと――」突然、サエが涙声になる。それでも懸命に続きを言おうとする。「言われに来たの」しゃくりあげる。鈴木はびっくりして変な音が口から漏れる。

「どうしたの？」

「忘れられないのよ」

もはや声には弱々しさしか感じられない。ふと、サエは手を伸ばし、鈴木の頬骨をなぞる。鈴木はヒューッと変な空気を口から漏らす。

「あなたを突き放したのはわたしなのに……」

鈴木はどこかで見た展開だなと思う。打ち切られた月9ドラマのラブストーリーだ。それに気付いたあとは、どうしようもなく決まりの悪い思いをする。
「どうか――」
すすり泣きが激しくなる。どうか落ち着いてくれと言いそうになる。
「どうか、あなたがわたしを許せるなら……」
彼女が顔を上げたので、近距離で見つめあうことになる。鈴木の胸は高鳴ったが、まずエリカのことを思い出した。やりなおすには、なにもかもが遅すぎる。いまはエリカがいる。
鈴木はサエを抱きしめていた。そうして本能の命ずるがまま彼女にキスをしていた。そのころにはもう、エリカのことはすっかり忘れていた。
泣いているサエの頭を撫でる。
「許せるなんて問題じゃない。僕だって、きみのことばかり考えてたんだ」
「ほんとうに？」
「うん」
力強くうなずくと、サエはほほ笑む。一筋のきれいな涙が流れる。
「ビールを買ってきたの。あなたがまた切らしていると思って。飲みたい？」
鈴木は力無くうなずく。

三回目のデートは楽しかった。エリカは待ち合わせ時間ちょうどに現われ、態度の悪い人間に悪態をつき、大声でアイスティーを注文したが、にこにこしているし、鈴木に気を使っている。
サエのことを考えると頭が痛かった。サエはやさしくておとなげ

があり、にこにこしているし、態度の悪い人間に悪態をついたりはしない。

「家に寄ってもいい？」

エリカがためらいがちに言う。鈴木もためらいがちに応じる。首を縦に振る。

なんらかの期待をしていたわけではない。エリカの本心を見破るためだった。彼女は上機嫌で鈴木の手を握った。

アパートに着くと、見事なまでの貧相さに落胆するかと思ったが、エリカはいっこうに構わず奥へ進んだ。鈴木はドアを開錠し、部屋に案内する。「お邪魔します」エリカはいそいそと部屋を見回す。とはいえ、たったの一間なのですぐに飽きる。エリカはその場に正座する。「いい部屋ね」ほんとうにそう思っている口ぶりだ。

鈴木はお茶の用意をした。暑い季節なので冷蔵庫の麦茶にさらに氷を付け足す。サエのことが思い出される。鈴木は雑念を振り切り、エリカにお茶を手渡した。

「いい部屋ね」

彼女はもう一度くり返す。物の少ない部屋で、リュックサックが目に留まったようだ。視線で鈴木に了承を得たあと、手にもってそれを眺める。古着屋で叩き売られていた商品で、価値の高さは神のみぞ知る。

ふと、彼女の顔色が変わった。

「これ――」

すこしだけ開いていたリュックの中身から、一冊の本を取り出す。今度は鈴木が顔色を変える。世界がばかみたいに冷えるのを感じる。

『蜜の穴の狩人』

エリカが困惑した表情でそれを見ている。なにか言われる前に、

なにか言わなければと模索したが、結果的にしょうもない台詞しかでてこない。
「大人向けの恋愛小説なんだ、たまにはいいかと思って」
「読んだの？」
鋭く言われる。ああ、そりゃあ読むとも、俺はただの男なんだ、そう言いたい衝動をぐっと堪える。
「ちょっとだけ」鈴木はこのときほど自分を情けなく思ったことはない。

「わたしなのよ」
エリカはわけのわからないことを言う。鈴木はとりあえず本をひったくって、それから彼女の話を聞くことにした。彼女の眼には歓喜とも驚嘆ともいえぬ色が浮かんでいる。
「わたしが書いたの！」
そう言ってにっこりと笑うが、このときの笑みは鈴木に伝染しなかった。
「うん？」
無意識のうちにつぶやいて、首を傾げる。言葉に理解が追いついたとき、鈴木はあわてて言っていた。
「ちがうよ小林さん。勘違いだよ」
感情は把握しきれずに「なにが」以前に「だれが」を考えてさまよっていた。心の裏側ではもっと理知的なところを思案している――「なにが」ではなく「どうして」だ。決定的な一言が足りずに、崩壊の手前でぐらぐら揺れている。
エリカが言う。
「ほんとうなの。わたしの仕事ってそれなのよ。わたし、ポルノ作家なの」
手にもっていたグラスが割れる。定番の反応にわれながら呆れる。

しかし鈴木は完全に、完膚なきまでに、いままですがり付いていたものが消えた。理屈どうこうではなくて、たしかに消えたのを感じたのだ。
口をぱくぱくさせる。

「なんてこと」
ようやくそう言う。エリカは肩をすくめる。
「いつかはふつうの小説を書きたいと思ってるわ。いまは仕方なく――でも、太宰治だって書いたことがある分野でしょう」
「でも」の意味を考える。よく分からない。昔のエリカがほほ笑んで、一緒に踏み切りを渡っていた。すばらしく濃厚な時間は、エリカの手により崩されようとしている。あのころのではなく、いまのエリカの。

「なんてこと」
それしか言えない。鈴木は思考を飲み込んで、そのなかを何度も行き来する。
「小林さん。再会してからずっと思ってたんだけど、きみってなんだか、もう僕の手の届かないところへ行っちゃったみたいだ」
「そんなことないわよ」
エリカの口ぶりは、どうということでもなさそうだったが、丸め込まれないように、鈴木は懸命に言葉を考える。
「そうなんだよ。きみは昔とちがう。いまのきみが悪いわけじゃないけど――」
はじめてエリカの瞳が曇る。フィルターが崩れて剥き出しの感情に出会う。
「どういうこと？　それってよくない話なの？」
うなずくのに時間がかかる。『蜜の穴の狩人』を見て、ようやく決心がつく。エリカとの日々は崩壊した。

「もう会わないでおこう。ずっと、いままでみたいに」

お腹に腕がまわされる。息をするたびに、そのか細い腕が上下した。シャツ越しのぬくもりを感じる。サエはテレビを見ている。鈴木も同様に、とはいえないのは、内容がまったく頭に入ってこないからだ。

時計を見ると、この番組はまだ始まったばかりらしく、司会者が饒舌なトークをしている。サエはものうげにほほ笑んでみせる。

「北条さんの奥さんに会ったの」

喉の奥で返事をする。サエは腕をそっと引き抜く。近距離で視線がぶつかりあって、ただならぬ雰囲気を感じ取る。

「いいひとね。エリカちゃんのこと聞いたわ」

なるほど、ぞっとしない話だ。鈴木はもう一度、喉の奥で音を鳴らすと、言いくるめる手段を探した。

「僕を――」

喉を鳴らす。ただの時間稼ぎだ。

「どうか、僕を許せるなら――」

携帯が鳴った。心のやり場を見失い、鈴木は黙り込む。サエが自分の携帯を取り出した。「もしもし」それから、驚きの声。

「北条さん？」

自分に浴びせられた視線を感じる。サエはちらちらと鈴木を見る。声を押し殺す気配がない。

「はい。そうなんです。ちょうどいま隣に。代わりましょうか？はい……わかりました。いまからこちらへ？」

そこですこしトーンを落とす。手で口元を覆い隠すが、なにを言っているかはすぐに分かる。

「ええ……ナイフはちょっと……そうですね。木製のものがいいと思います」
「なんの話をしてるんだ？」
鈴木はうろたえながら彼女を見た。携帯の畳まれる音がして、サエは真顔で答える。
「バットを持ってきてくれるって」
なんの話だ。
信じられない思いで首を振る。
「僕はかれに殺される」

サエが笑ってくれずに、余計に不安になる。どうしようもない沈黙が、ふたりの間をただよっていき、無言は言葉以上のものを語る。鈴木は初めて、サエが傷付いていることを知る。
「ほかに特別なひとがいるなら、どうしてわたしに言ってくれなかったの？　エリカちゃんと天秤にかけられて、それで付き合ってもらったところで、わたしがよろこぶとでも思ったの？」
厳しく詰め寄られて、鈴木はグウの音も出なくなる。今日のサエは泣いていないが、無言と同じように、それは涙よりも重たいことがある。

また沈黙。
サエはなにかを決心する。鈴木にはそれがよく分かる。サエは顔を上げる。
「わたし……怒ってないの。ガッカリしたけど……そうなの。ガッカリして、もう二度と会いたくないし、あなたなんか消えちゃえばいいんだわ」
凛然たる口調ではなく、むしろどこか弱々しく、なにかを模索しているようであった。鈴木はショックを受けて、しばらくなにも言えなかった。
ようやく口を開く。

「ごめん」
サエの肩に腕をまわす。
「ごめんよ」
次の瞬間には、拳で殴られて床にぶっ飛んでいる。ちょうど北条の到着と重なって、どうしようもないまま数発叩かれる。

かくして鈴木は北条いわくの「神々の発明」である女の子を失った。サエはエリカとの復縁を勧め、すこしずつ鈴木の前から消えていった。
エリカは電話をよこさなかった。鈴木から断ち切ったのだから当たり前だ。十数年におよぶ「純愛」とともにエリカも失った。

北条夫妻は子作り強化期間中だそうで、最近は酒にも誘われていない。これについてはほっとしている、鈴木は酒が飲めないからだ。

もどり続けた恋愛も、前へすすむ恋愛も途絶えてしまった。ほかでもなく鈴木自身のせいで。鈴木は過去に生き、現在とのギャップに耐え切れなかった。じっさいにエリカは鈴木とは違う、べつの世界にいるひとだ。
では、サエは？　鈴木は彼女を傷付けて、彼女が望んで鈴木と別れた。それを鈴木がどうこう言う権利はなかった。簡単な話だ。

鈴木を縛るものはなにも無くなった。鈴木はエリカに別れを告げて、晴れて自由に身になったのだ。いいか悪いかはともかくとして。

きっかり一年後、仕事から帰ると留守電が入っていた。
鈴木は再生ボタンを押して、手狭な室内にスーツを投げ捨てる。

エリカの声がする。幻聴が聞こえたかと思う。またエリカの声がする。心臓が割れそうなほど痛くなる。

おそるおそる、電話機に近づいた。やはりエリカだ。すこし機械的な色がかかった声で、「最新作を読んで」と言う。

どうしようか悩む余裕もなく、鈴木は本屋に急いだ。余裕がないので、近所のよく行く本屋だった。ここでポルノ小説をうろうろ見て回るのがどれだけ恥ずかしいか、行動に移してから気付く。顔馴染みの店員が鈴木をじっと見ている。

『蜜の穴の狩人』で使用されていたペンネームを探した。

ひとつの本が目に留まる。新作の棚に並べられていたものだ。鈴木は手にとって、時折店員の目を気にしながら、思い切って表紙を開く。

『サメと泳ぐ夜』

文章はこう始まっている。「かれの肌は潤い、ういういしく、もぎ立ての果実さながらに、わたしを愉楽へ引きずり込もうとする。温もりにそっと指を這わせれば、わたしの胸は鼓動を打って、甘美な熱が体内へ溶け込んでいく」面倒なのでしばらく飛ばして、また適当なところを読み始める。「かれとともに溺れる夢はうつくしい破壊だった。かれにしがみ付いて、わたしはただ、夜明けの匂いを待つばかりだった。うつくしい破壊もなにもかもを忘れ去ってしまえるよう」

最後の一ページに飛ぶ。

「かれは不可逆、いまを生きている。それはダイヤよりもずっと価値があり、わたしは目を閉じる」

鈴木は本を閉じ、エリカに電話をかけた。留守電なのは心底ちょうどよかった。時間と場所を一方的に告げて、電話を切った。彼女に会わなければならない。

――かれは不可逆を愛する。

第5話：めでたし？

エリカはいまも変わらなかった。

窓の外を眺めながら、ぼうっと息をついていた。再会した日のような、薄化粧と締まりのない服。あまりに死んだ顔でいるものだから、周囲の客から浮いている。

今回はアイスティーではなくコーヒーを飲んでいた。店員に勧められ、お代わりを注文している。（一体いつからいるのだろう？）鈴木は何食わぬ顔をよそおい、彼女と同じテーブルに着いた。

「読んだよ」

と言いながら、購買済みの『サメと泳ぐ夜』を袋から出す。表紙はそれほど卑猥じゃないので、ひとの目を気にする必要はない。

「ひどい話だった」

これは偽りのない感想だ。文章も相変わらず陳腐で言い回しがくどく、シナリオも単純なわりには理解がしにくくて、そのうえ濡れ場がしょうもない。鈴木が読者ならば金をむだにしたと思うだろう。

「教えてくれ」

エリカの目が初めて鈴木を捉える。鈴木はひとつひとつ、間違えないようゆっくりと言う。

「あれは僕なのか？　そして、僕のサメの話なのか？　どうして？」

「あなたじゃない」

エリカははっきりと発音する。それこそ間違えないように。

「過去のあなたよ」

空気がなまぬるい。ここではだれも見ていない。孤立された空間に、過ぎ去った日々の残り香がただよう。すぐに消える。その一瞬

のあいだにすべてのことを理解する。
鈴木は言葉以上のものを伝えようとする。何度も指を交差させ、二度と戻れない時空を旅する。

「大人のきみに会ってから、ぜんぶ壊れた気がした。ほんとうにきみが好きだったのに……美化された思い出にすがってたんだ。僕にとって、きみはきみであってエリカじゃない」
ひどく残酷な話だった。だが、鈴木には自分の本心が分かっていた。言葉にして認めた瞬間に、取り返しのつかないことをしたと気付く。無意識に唇を噛む。

「わたしも」
エリカはおだやかな顔をしている。
「サメの話をするあなたが好きだった」

残り香がただよう。
ふたりはそれを知る。
過去が氷解し、現在に流れ込んでいく。長かった時のなかで、ようやく時間を巻き戻せた気がする。時空の旅は終わった。あのころにもどれた。でも、望んでいた結果はここにはない。
エリカの目がなにかを訴えている。だから、鈴木は求められたことをする。
「さよなら」
と、言う。

その言葉の意味について考える。しかしやがて吹っ切れる。意味などない。感じたこと以上の意味なんて求めるべきじゃない。エリカは淋しげで、鈴木はなにかを哀しんでいる。それで十分だった。

「会えてよかったわ」

最後に彼女は、鈴木が大好きな笑みを浮かべた。それでも彼女は、あのころとは違うのだが、そのときばかりは鈴木もほほ笑む。
「僕も」
鈴木はそれから席を立つ。
これからの生涯、もどることはもうないだろう。

エリカがふと呼び止める。出し抜けに。喫茶店から出かけていた鈴木は立ち止まり、空耳かとうたがう。
「過去はもう消えた？」
おかしな問いかけだった。鈴木はすこし間を置いて、答える。
「きれいさっぱり」

振り返ったとき、エリカの淋しげな瞳が鈴木をつかまえる。店じゅうが静まり返っているように思える。もちろんそんなことはなく、周囲の人間は鈴木たちのことなど気にも留めない。
エリカはテーブルでひとりただよっている。

「過去のあなたは消えたわね」
ただよう思考は鈴木を引きつける。鈴木は、彼女が言ったことはすべて、なんらかの心を表現しているのだと思う。
だからその場を動けずにいる。
エリカの唇がふるえる。

「もう一度――」
同じように、言葉までふるえている。もう一度、と、彼女は言いなおす。
「どうか、あなたがわたしを許せるなら」
「許す？」
鈴木は驚いて聞き返す。エリカに罪などない。しかし彼女は気に

した様子もなく、店の隅でただようばかりだ。コーヒーを飲む余裕さえないのだ。

「昔のことはぜんぶ無し。あなたがわたしを、初めて会った人間と思えるなら」

淋しげな瞳に、笑みをたたえる。エリカの引き込まれるような強さに、鈴木は心を打たれる。いや、はたしてそれは強さなのか。凛然たる面持ちで、鈴木からけっして目をそらさない。

「もう一度、わたしにチャンスをちょうだい」

ぱたぱたとスリッパの音がする。日常のざわめきを抜けて、それは耳に飛び込んでくる。太陽の匂いがする。外で虫ががなっていたが、またもやスリッパの音に掻き消される。

「ツヨシ。ツヨシ」

なにかの記号のように彼女は言った。胴回りが少々でっぷりしてきた彼女は、最近はカラオケダイエットにはまっている。

「あの子から手紙よ。元気でやってるって」

「ほが？」

情けない声を上げる。口内の泡を洗面台に吐き出してから、また彼女に向き直る。

「どれどれ」

一年前に上京したばかりの娘を想い、鈴木ツヨシは手紙を受け取る。それのひとつひとつの細緻な筆跡に目を通していく。その間も、彼女は隣で待っている。

「ターミネーター9が上映再開だって」

ようやくそれだけ言う。彼女はほうっと息を吐き出す。鈴木も泡を吐き出し、歯ブラシを入れ物に戻した。
「いろいろあったわよね」
「映画の出来を見て、ジェームズ・キャメロンが暴動起こしたからな」

それからタオルで顔を拭き、手も丁重に洗ったあと、彼女の体を横目で見る。いまはもう小林ではなく、鈴木エリカとなった彼女。
肉付きこそよくなったものの、スタイルはまだまだ衰えていない。鈴木はそっと手を伸ばし、彼女の腰を引き寄せる。ここで決め台詞。
「僕たちもひさしぶりに映画でも――」
しかしあっさり断ち切られた。彼女は鈴木を払い除けた。
「だめ。無理。なんど言ったら分かるの？　有川浩さんの小説のあとがきを担当することになったの。数枚ほどだけど、今日中に仕上げないと」

鈴木はげっそりしながら言った。
「有川浩ももう何歳なんだ？　いまはピカレスク小説を書いているんだっけ？」
ピカレスクとは悪漢小説で、ならず者の冒険が描かれる。彼女はくすくすと笑い、またスリッパでリビングのほうに引っ込む。鈴木もあとに着いていく。

太陽の匂いが一気に強くなる。リビングはカーテンが開け放されていて、日光が室内を白く照らしている。
彼女が振り返り、鈴木の考えを見越したように、いたずらっぽく笑う。
「今月中はずっと無理。原稿の依頼が溜まってるのよ」
「そりゃあ仕方ないね」
鈴木は物分りよくうなずいて、彼女の背中をうらめしげに見つめ

る。彼女はノートパソコンを起動し、鈴木のことなどまるで見えていないようだ。
ポルノから足を洗ったのはうれしいが、最近はめっきりデートの回数が減った。たまにはふたりで食事などに行きたいものだと、鈴木はいつしか遠い目になる。

もどる。あのころのエリカならなあ。
逆戻り。
いやあまったく、若いころのエリカはかわいかった。

鈴木は呪文のようにくり返し、やがて手紙を開いた。微かに娘の残り香がした。晴天の草木が、戻れない時空を押しやる。乾いた土の匂いを運んでくる。鈴木はソファーに寝そべって、エリカの笑い声を聞く。

それから鈴木は数十分、性懲りなくあのころに逆戻りする。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4330h/

リバース

2010年11月26日07時17分発行